

布施の心

(3)

本多 克也
(講學も)

文・徳永 耕一

[先生]

母は、身内からは冷たくあしらわれたが、地域の人たちには好意的に見られ、尊敬もされていた。

「あんたどこの母ちゃんは、ようがんばるし、良か人だもんね」

ついでに私も、「あんたも母ちゃんに似てるたい」と褒められることがあり、その時は嬉しかった。

酒屋といえば専売品を取り扱っており、一見裕福に見えるが、内実は大違いだ。

販売はつけが当たり前で、支払いは盆正月というのが多かった。一方で、仕入れは現金なので、つなぎの資金が必要になる。我が家は資金力がなく、かなりの借入もしているようだった。そのせいか、皆がイラついて、そのとばつ

しかし、苦しい環境の中でも母は弱音を吐くことはなく、店を切り盛りし、朝は四時から起きて、私たちの食事や洗濯の世話をして、歯を洗いしばつて耐えていた。

そして、人には優しかった。

ある日、顔がひどくだれた中年の客が入ってきた。角番安上がりな酒の飲み方だ。その客は、あまりに顔が醜いため誰からも相手にされず、自分も人目を避けるようにして生活していた。

店に入つてくる前に外から必ず中の様子を窺つて、お客様もいす母だけなのを確かめて入つてくる。五尺の枠酒を美味しそうに飲むと、静かに帰つて行く。

私は子ども心にその人が怖かったが、母は平気で、その

人にも普通に接して、会話を交わし、お酒を出していた。そんな母がいつもよく口癖のように私に言っていた。



2023年3月本多産業株式会社は
設立50周年を迎えます。

本多産業株式会社
【本社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814
TEL:045-869-1133
【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677
TEL:0957-38-3520

「人様にはよせんばよ」

その言葉は、終生私の心に刻まれている。

水仙も私の心に残る心地よい思い出だ。

母はよく、秋から冬になると、庭に咲いている水仙を花瓶に挿して、私の机の上に置いてくれていた。日頃忙しくて構つてやれないことのお詫びの気持ちだったのかも知れないが、私は何よりのプレゼントだった。水仙は、今でも私が一番好きな花だ。

中学高校時代、私は先生にも恵まれた。

とりわけ、一九五〇年からの山田中学校時代には、後にたいへんお世話になる国語の宮崎轟（とどろき）先生に出会えた。

先生は、教え方がとても上手で、わかりやすく、私も国語が好きになった。授業も楽しかったが、それだけではなく、先生は私の家庭の事情も知つて、それとなく私のことを気にかけてくれた。

当時は、戦後民主教育の初期であり、先生の存在や期待は今よりもはるかに大きかった。単に教科を教えるだけでなく、子どもたちの物の考え方や将来の生き方にも影響を与えた。

高校は、一九五三年から三年間、諫早市にある諫早高校だったが、化学の中野宅馬先生もまた素晴らしい教育者だった。先生は、厳しくて頑固な反面、愉快な一面もあり、生徒からは「アボガドロ」というあだ名で親しまれていた。ちなみに、アボガドロとは、イタリア出身の有名な化学者の名前だ。

「本多君は、他の勉強はいつちよんせんとに、化学は頑張るな！」

先生から褒められておだてられたことで、「自分はもしかしたら化学者になれるのかな」と、子ども心に短絡的な思いをしたものだ。